

佐賀県立博物館報 №57

佐賀市城内1丁目15番23号 TEL 0952(24)3947

婦人肖像

高木背水

(一八七二—一九四三)

背水の肖像画を代表する傑作である。三十号の大きさに描かれた作品で、やわらかなタッチの白い衣装が暗い背景から見事に浮き出されている。描かれているのは、その対象のすべてが物語るよう、高貴な婦人である。しかもその表現は、節度と柔和そして思慮分別を私たちに納得させる。

作品が描かれたのは、恐らく背水が、イギリスを中心ヨーロッパでの絵の修業を終え、大正元年の二月に帰国してまもないころのことであろう。イギリスの十八世紀の画家、レインズ、ゲインズバラが描く肖像画の香氣を多分に含んだ作品といえる。この肖像画はイギリス時代の作品がきわめて少ないので、背水が彼地で学んだものを如実に教えてくれる作品である。



目次	○高木背水作「婦人肖像」.....	1
	○高木背水をめぐる人々	2 ~ 4
	○資料紹介—黒田清輝作「小代為重像」.....	5
	○研究メモ—佐賀県内のサギ科の鳥について	6
	○県内博物館案内（その13）.....	7
	○行事のお知らせ.....	8

高木背水展

明治美術会、白馬会、文展、白日会等多くの展覧会に出品を重ね、豊かな画歴をもつ本県出身の油彩画家高木背水の生涯にわたる作品を掘り起こし、広く県民に紹介するとともに、明治、大正、昭和にいたる近代日本洋画史的一面をさぐるものとする。

主 催 佐賀県教育委員会、佐賀県立博物館 会 場 佐賀県立博物館

会 期 昭和57年10月7日㈬～11月3日㈬(休館日10月12日、18日、25日)

観 覧 料 大人 500円(400円)/大・高生 250円(150円)/中・小生 150円(100円) ()内は团体料金、団体は20名以上

展示概要 油彩画 140余点 木炭画、色紙 20余点

高木背水をめぐる人々

高木誠一郎、明治10年9月5日佐賀市松原町に生まれた。背水は号である。現在残っている作品のほとんどに「背水」のサインを見ることができる。

父豹三郎、母栄子、代々肥前の國の豪族、高木肥前守の嫡流高木家は、明治7年の佐賀の乱で、その家産の大部分を失い、背水の生まれたころはすでに家運は傾き始めていた。

背水は独立不羈、篤実篤行を宗とし、その背水と称したように、つねに画壇の一隅に頑張り、近代日本洋画史の一画家たらんことを自らの彩管で示そうとした。

しかし背水が没して今年で40年、私たちが背水の名前を近代絵画史において見ることは困難である。ましてやその作品を目にすることは、多くの人々にとって皆無といえる。

このたび高木背水展を企画するにあたり、70点以上の作品に触れることができた。しかし時の経過の中で失われた作品も数多く、今回、この中、木炭画、色紙も含め150点ほどを展示することにした。

ここでは、これまで知られることがなかった洋画家高木背水について、彼の画歴を語る上で必要と思われる人々をとりあげ、背水のひととなりの一端を窺い知ろうというものである。

岡田三郎助 明治2年(1869)～昭和14年(1939)

岡田は、高木と故郷を同じくし、幼いとき上京、洋画を曾山幸彦(後に大野姓となる)に学び、黒田清輝、藤島武二らとともに、明治・大正の洋画界を代表する画家となった。

高木は明治22年12歳のとき佐賀の地を離れ、一人東京へ向かう。明治25年の春、赤坂高等小学校を卒業した彼は、田中猪太郎が経営する写真版印刷の工場に年期奉公に出ることになる。この田中が岡田三郎助の従兄弟に当たり、このとき、高木は、白面の美青年だったという岡田にはじめて出会うことになる。

その後、高木は田中印刷所を退社、大宰館に入るが、この大野幸彦の指導するところの画塾(明治25年5月以降、堀江正章、松室重剛が指導する)は、門弟を選ぶのに大変きびしく、またこのとき北沢栄天がすでに塾長としており、高木は入塾を許されなかつた。ここで彼を助けたのが、やはり、6年前から大野塾で学んでいた岡田

であった。岡田は、明治26年7月大宰館を卒業、このあと、北沢に次ぐ2番目の塾生として、高木が入った。とき明治27年正月のことであった。

同じ肖像画家、風景画家としての岡田と高木のその後歩みは、大きく異なり、他国において岡田たらんとした高木は、以後、物質的、精神的に苦難の道を辿ることになる。

黒田清輝 庆応2年(1866)～大正13年(1924)

「高木背水伝」のなかに、黒田が高木とともに村井吉兵衛の晩餐に招かれる場面がある。高木は、それ以前から、実業家吉兵衛に京都の別荘のための壁画を依頼されたこともあり、今回は、この村井の後援で、ヨーロッパへ行く手だてのひとつであった。

高木と黒田については、黒田が白馬会研究所時代からの先生ということで、高木としてはあくまで指導を得るという立場であったが、しかしそれは絵画上の問題というより、人事のことでの交渉がそのおもな内容であったと思われる。

黒田の日記には、しばしば高木についての記述がみえる。

一明治36年11月18日「四時頃高木誠一 鷹野伊勢ノ両人來訪」この年の春、高木はベルツ博士に伴われて朝鮮へ行き、9月に帰国していた。また高木の本名は誠一郎であるが、画家仲間ではたんに誠一と呼ばれていた。

一明治37年4月30日「……(教場ヲ)十二時過退出 直チニ帰宅ス 午後小万高木誠一來訪……」小万は小林万吾のこと、この頃彼は洋行の希望があり、黒田にこのことを依頼していたが、この年の5月渡米予定の高木と共に黒田を訪れた。

一明治37年5月20日「前八時四十分新橋発列車ニテ岩村(透)、白瀧(幾之助)、高木ノ面々出發 吾々同乗横浜マデ送ル 十一時頃波止場ニテ別レヲ告ゲタリ……」高木27歳、初めての外国である。目的地はアメリカ。岩村は東京美術学校教授としてセント・ルイス万国博覧会美術部審査官を嘱託され、アメリカ滞在後イギリスへ向かった。白瀧もさらにフランスへ行き絵の修業をするが、高木はヨーロッパへ渡り得ず帰国することになる。2年間のアメリカ生活であった。

一明治43年3月10日「……夜高木来訪」

一同年3月29日「高木来訪 苛目ニ參上ス」高木は村井

吉兵衛の援助でイギリスに行くことができるようになった。それがこの年の4月のこと、この日記に記された頃、高木は、黒田の了解を取りつけようとしていた。

一大正8年11月13日「……後チ京城ノ高木氏入来 十二時過マデ語ル 今回モ展览会開催ノ為メ帰京セル趣……」高木は大正4年以来朝鮮に渡り、国内の画壇と縁を切ることになる。朝鮮では、はじめ東大門内忠信洞、のち往十里に画室を建てるが、彼は、朝鮮における美術展覧会を企図していた。その第1回展が開かれるのは、大正11年5月、審査員は洋画に岡田三郎助、日本画に川合玉堂、また高木も審査に加わった。

一大正9年8月15日「……今晚在巴里ノ辻永 三宅克己 加藤静兒 高木背水ノ四氏ヨリ封書又ハ絵葉書到達ス 高木氏ノ外ハ何レモHôtel des Grand Hons Üierニ止宿ノ由ナリ 高木氏ノ住所ハ不明」この年の5月、高木はふたたびヨーロッパへ行く、第一次大戦後のヨーロッパの美術の視察が目的であったという。

以上、黒田と高木の交渉を日記に追ってみた。

中沢弘光 明治7年(1874)―昭和39年(1964)

大野幸彦亡きあと、玉置金司、岡田、矢崎千代治、中沢弘光ら数人の遺弟が大野の友人であった堀江正章、松室重剛を先生とし、大野塾は、大幸館として新たに出发することになった。このとき新しく入ったのが北沢栄天と高木背水であった。高木と中沢は歳も近いためか、2人でよく写生旅行に出かけたようである。明治34年の夏、彼らは箱根へ行く。そこで3ヶ月滞在し、高木は堂ヶ島の景色を中沢は山駕籠の風俗を描いた。中沢は翌年の第7回白馬会展に「箱根の山駕籠」を出品している。また、この同じ年の夏、高木は小田原へ行き、外光派の研究をしているが、このとき中沢も一緒であった。

高木はその後、朝鮮、アメリカと外国への旅がつづき、明治39年帰国するが、翌40年の春、中沢と奈良へ旅行する。この高木と中沢との親交は、大正6年春、朝鮮水原の地で出会うなど、高木の晩年まで続いたようで、昭和12年、高木が還暦を記念して開いた回顧展の際、編纂された「高木背水伝」に中沢は、40余年の交誼を感謝しつつ、序文を寄せている。

和田三造 明治16年(1883)―昭和42年(1967)

明治32年、和田が福岡から上京してきた折、当時、魚屋の2階に住んでいた高木のもとへ、「昨日から飯を食わぬ」と言って和田が尋ねてきた。これ以前の2人の接触については定かでないが、以後高木は何かと和田の世話をやいたようだ。しかし、その後の彼らのつながりは薄く、むしろ互いに避けるところがあった。わずかに彼らのつながりを感じさせるのは、明治43年、高木がイギリスに滞在していたとき、高木が一時渡ったパリで和田とその仲間に出会ったことであり、また、大正7年、和田は別府湾に望む日出町の的山莊に一年余り逗留するが、

後日、高木が関節炎を頑固、療養に足を留めたのが、この同じ別府湾上の町であった。

和田三造、中沢弘光にしても、彼らに反して、高木は陽の当らぬ存在であった。

松本弘二 明治28年(1895)―昭和48年(1973)

大正2年春、高木は永田町鍋島侯爵邸内の一隅に簡素な画室を新築した。それと同時に、教室を開いたが、これは失敗で、1年余りで閉じてしまった。その頃の門人の一人が松本弘二である。高木はクラシックを基礎に、教室では、厳重なモデル描写、また写生旅行等において、風景の研究をはげました。しかし、こうした教育方針は、もはや当時の流儀に逆行し、昔風のスバルタ教育は弟子達に受け入れられなかった。

そのころ松本は、当時しばしば高木を訪ねていた広津和郎を知ることになる。このことが、松本の目を大きく見開かせ、その後の文学への関心、雑誌「解放」「文芸戦線」の編集などと、高木の世界から大きく離れ、やがて、松本は、二科の人となる。

広津柳浪 文久元年(1861)―昭和3年(1928)

明治35年2月、柳浪は2度目の結婚をする。相手は、高木武雄長女潔子であった。背水の2つ違いの姉である。潔子は、そのころ鍋島家の奥女中をしていた。この潔子が縁あって広津家へ嫁ぐことになった。こうした関係で、柳浪の次男和郎(明治24年生まれ)が高木家にしばしば出入りしたものと思われる。和郎は小さい頃から文学に興味を示す一方、匿名でコマ絵とか時事漫画に投書していた。中学校を卒業のとき、父柳浪に、美術学校への進学を希望したともいう。結局、早稲田大学文科に入る。現在、和郎が描いた油絵が残されているが、色彩は高木の影響をとどめている。

エル温・ベルツ 嘉永2年(1849)―大正2年(1913)

明治30年11月、高木は、鍋島侯爵家の玄関書生となるが、この間に彼は、「日本の近代医学の父」と呼ばれるベルツと知り合った。ベルツは明治9年來日して以来、明治38年ドイツに帰国するまでの29年間、そのほとんどを東京大学の医学部にあって、日本の医学の発展につくした。

高木がベルツに初めて会ったのは、鍋島家の応接間であったという。ベルツは、当時大学での教授のかたわら、貴顕紳士との交際広く、ある日、診察で訪れた鍋島家で、イタリー皇族の肖像画に目をとめ、その作者について聞いたのが高木との出会いであった。高木は、これが機縁で、人類学の研究をしていたベルツの標本作りを手伝うことになった。

やがてベルツは、明治35年、東京大学をやめることになるが、引き続き宮内省御用(侍医)として3年間日本にとどまり、日常の往診以外は人類学や考古学研究に専念した。翌年にかけて、仏領インドシナと朝鮮に旅行するの



高木背水と
姉広津潔子

もこれら研究のためであった。

「ベルツの日記」によれば、ベルツは明治36年4月22日釜山に着く。このとき画家高木を同行している。もちろん高木は、ベルツの研究上の標本技師としてである。彼らは、京城から金剛山へ向かっている。そして長安寺、ベルツは、「ここの眺めは全く絵のようである。」と日記に記すことになる。後年、ベルツが遠く異国に去ったあと、高木は、再び金剛山を訪れ、ベルツの言葉をカバンアスに写すことになる。

村井吉兵衛　元治元年(1864)一大正15年(1926)

村井は、明治の実業家のひとりで、明治27年日本ではじめて紙巻煙草を製造販売し、その後、印刷会社、鉢山事業、植林事業を興すなど、産業振興に大きく貢献した人である。

この村井に知られたことで、高木は、出世のいとぐちをつかむことができた。

明治41年、高木は、京都の村井の別荘「長楽館」に壁画を依頼される。すでに長楽館は、前年の6月に上棟、洋風4階建の建物は完成真近であった。依頼された壁画は、1階貴賓室の壁面を飾るものであった。高木は、ここに、長径50cmほどの楕円形のカンヴァス画を12面、はめ込むことにした。皇居二重橋を第1面に世界名所12景を描いたものだった。このことにより、明治43年、高木は、村井の後押しでイギリスで絵を学ぶことになるのである。

大正元年高木は帰国するが、彼は村井の後援で帝国ホテルで展覧会を開催した。

このころが、あるいは高木のもっとも華やかな時代であったかとも思われる。高木は30代なばかりである。その後だいに画壇は彼に冷たく、また高木も画壇に背を向けるようになる。大正4年朝鮮に渡るのも、そうした画壇への嫌気からであったろう。

深川亮蔵　天保3年(1832)―明治35年(1902)

明治30年の秋、高木は鍋島家の玄関書生となつた。このときの鍋島家の家令が深川亮蔵であった。深川は、佐

賀藩弘道館に学び、勤王運動に参加、幕府老中堀田備中守の殺害を企てたことにより幕吏に捕われた。このとき藩主鍋島直正が彼を助けたのである。以後、終生を侯爵家に捧げることになる。

高木はこの深川の私宅を訪ねる。毎日食物さえ絶えることしばしばで、深川翁の世話を頼んだのである。高木はそのころ白馬会研究所に通っていたが、夜学でも行くや行かずの日々であった。また同じ頃、美術学校の入学を果たしたが、玄関書生のかたわらでは長く続かず、美校も3ヵ月ばかりで退学した。結局、ふたたび白馬会にもどり、高木は白馬会で一番長く学ぶことになる。

明治35年2月高木の娘潔子が広津家へ嫁ぐ。この4月高木は侯爵家の職を辞す決心をする。白馬会の仲間が、先へ先へと進んでいくことに対する焦りがあったものと思われる。

高木は侯爵家の職を去るにあたり、辞表を携えて深川を訪ね、5ヵ年間の好意を謝し決意を述べた。「志士深川亮蔵翁を憶ふ」の中で高木は、このときの深川の言葉をくり返し心に刻みつけている。深川は誠めた。「絵が好きならいくらでもかきござい、此處の勤めは世間と違ふて暇は沢山あるけん先づ飯盤儀をして、絵もかゝれんぢやなつかい。蓋し絵画を以て天下に頭角を現す事は出来ぬ、御前の辞表は三日間預つとくけん考へて復た来ござい……」3日の後のふたたび訪問して強く志を述べた。深川は大喝一声「こ、迄云ふて聞かせても聞かんかい……明日から飯やどぎゃんして食ふかい……」高木は即座に「背水の陣で御座る」と答えた。これで深川は今までの雷声一変して温顔となり、彼の願いを許したという。「背水」という号のいわれである。

深川翁はこの年の12月22日逝去した。

主な参考文献

- 『高木背水伝』直木友次良編（大肥前社、昭和12年3月）
- 『松本弘二遺作展』図録（佐賀県立博物館、昭和49年7月）
- 『堀江正章とその周辺』図録（千葉県立美術館、昭和53年12月）
- 『岡田三郎助展』図録（佐賀県立博物館、佐賀新聞社、昭和54年7月）
- 『和田三造展』図録（北九州市立美術館、昭和54年9月）
- 『中沢弘光展』図録（奈良県立美術館、昭和55年5月）
- 『黒田清輝日記』第3巻、第4巻（中央公論美術出版、昭和42年3月〈第3巻〉、昭和43年2月〈第4巻〉）
- 『ベルツの日記』（上）菅沼竜太郎訳（岩波文庫、昭和54年2月）
- 『明治大正文学全集第9巻』一広津柳浪、広津和郎著（春陽堂、昭和5年4月）
- 『父広津和郎』広津桃子（中央公論社〈中公文庫〉、昭和54年8月）
- 『大野画塾の学生』三宅克巳訳（美術新報第2巻13-14号、明治36年9-10月）
- 『志士深川亮蔵翁を憶ふ』高木背水（大肥前第6巻4号、昭和11年4月）

(学芸員 松本誠一)

黒田清輝作「小代為重像」

左斜めを向いた顔には、幾つかたさが窺える。表情からくる一種張りつめた印象が、灰色のバックの中で、顔に用いられた全体に青っぽい色調と朱、赤、橙などの色とあいまって、画面に生氣をかもし出している。冷のあたりはほとんど黒線で輪郭をとっただけであり、バックにも塗り残しがあるが、髭をたくわえ、鼻筋の通つて整った顔立ちの小代為重を、絶妙なタッチで的確に描出している。

黒田清輝は、明治29年に大橋乙羽と対談して次のように述べている。

「……一つのものに就ても、其色の變化に人が目をつける。私などもそう云ふ空氣の中に育ったもんですから、只物の形をかくと云ふ丈ぢや氣がすまない、其處で色々研究して書いて見せると、此方の人の目に慣れないとものだから、善し惡は兎に角、顔と云ふものは白いものだと思って居った所が、青く書いてあったり、髪の毛が黒いものだと思って居ると黄に書いてある、さうすると隨分攻撃される、それは攻撃されやうが、されまいが、新派の特色なので、さふ云ふ變化をやるのです。それだから寫真などを見て、やるなどさ云ふ様な事は一切やらない、一つの規則と云ふもの、たとへば影は黒くすべきもの、日向は白くすべきものと云ふやうなことを、私なんかは大に嫌ひます、……」

黒田らの画風は、黒田と久米桂一郎が帰国する以前の一般に暗い色調の日本の洋画を旧派と呼んだのに対し、新派という名称で呼ばれていた。つまり、黒田は、いまだ西洋画の技術修得に専らな日本の洋画界に、外光派的手法による明るい描法をもたらし、物を見て起きた感じを描くことの大切さを示したのである。黒田の答弁には、将来の日本の洋画界をせおって立とうとする気勢を感じられ、この「小代為重像」は、ごく小品ながら彼の言葉を裏づける一例といえる。

この絵に描かれた小代為重は、文久元年(1861年)佐賀市に佐賀藩士中野教馬の三男として生まれ、のち小代家の養子となっている。明治8年に上京し工部省修技校などで学ぶたわら、洋画を百武兼行、川村清雄に指導を受け、その後千葉師範学校、工科大学、東京電信学校などに勤め、明治20年の明治美術会の創立や、同29年の白馬会の結成に参加している。同33年にパリをはじめヨーロッパを訪れ、帰国後は青山学院中学部や青山女学院などで教鞭をとり、晩年は町の発明家として、また絵画教育の分野で活躍し、昭和26年90歳で没している。小代の画風には黒田の影響がみられるが、在世期間の割に残された作品はごく少ない。

余談ながら、小代の実兄中野致明の次男が中野辰三、

後の画家山口亮一であり、致明の長女、つまり山口の姉が久米桂一郎の夫人にあたる。

黒田と小代との交友は、白馬会結成の頃からはじまったと思われる。その頃から、黒田の日記に小代の名が頻繁に出てくるし、白馬会の誰となく併せての黒田の気さくなスケッチ旅行へも何度か加っている。

この絵もそのような旅に小代が同伴したときの作品であり、画面向かって右下に「明治三十年六月六月箱根湯本萬翠樓ニテ寫ス 黒田清輝」と示されている。

明治30年という年は、夏箱根に出掛けた際に描いた「湖畔」のほか、「大原海岸」、「久米桂一郎肖像」などの多くのスケッチ風の作品に、寓意の大作「智・感・情」を描くなど、黒田の作画活動が最もあぶらの乗り切っていた時期であった。そして、小代像のようなスケッチ風の作品に、黒田本来の自由闊達な性格がよく表われているよう思える。

最後にこの絵の描かれた萬翠樓は、黒田がよく利用した宿のようで明治33年の日記に「一時間にて湯本ニ達す時ニ七時半頃也例の萬翠樓福住の三階に泊る。此家の風呂はいつもながら清潔にして心地よし」と書いている。

(学芸員 福井尚寿)



25.3×18.0 油彩 画布

研究メモ

佐賀県内のサギ科の鳥について

県内で知られているサギにはサンカノゴイ、ヨシゴイ、オオヨシゴイ、ミゾゴイ、ゴイサギ、ササゴイ、アカガシラサギ、アマサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、クロサギ、アオサギ、ムラサキサギの14種である。このうちオオヨシゴイ、アカガシラサギ（昭和49刊、日本野鳥目録第5版にあるだけ）、ムラサキサギは確認例が少ない。

現在サギ類は、海岸以外では見る機会が少なくなったが、県内で過去において比較的に多かったものはヨシゴイ、ミゾゴイ、ゴイサギ、ササゴイ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アオサギである。サンカノゴイ、クロサギは一般にはあまり知られていない。

シラサギは、白い体毛のサギ類を総称して呼んでいるが、この中にはダイサギ（オオダイサギとチュウダイサギの2亜種がある）、チュウサギ、コサギ、アマサギがある。ダイサギはアオサギと同大であるが、その数は少なく、冬鳥で夏は他方へ退去するものが多い。チュウサギはダイサギよりやや小さいサギであるが、海岸の干がたではよくみかける。冬は南方へ移動する夏鳥である。しかしダイサギ、チュウサギの一部は県内で越冬するものもある。コサギは小型のシラサギで越冬もするが、夏にはその数が増加する。近年県内でもよくみかけられるようになった。旧佐賀市街のクリークや川、池、溝にも降りていることがある。頭には冠毛があって、純白で美しい一番よく目につくサギの仲間である。アマサギもシラサギの仲間として取扱っている。アマサギはコサギ位の体である。冬羽は白色であるが夏羽は頭部と背部が橙黄色に変わる。県内では有明海、唐津湾で春から初夏にいくらかみられ、海岸近くの水田でも時々みられることがある。このアマサギは他のサギ類と異り、魚類よりもハエやカガボなどの昆虫類を好んでよくたべる。

ゴイサギは冠毛があつて頭部と背面が緑黒色の美しい体色である。昼間はうす暗い山林中に住み、夕方から夜にかけて活動する。漢字では五位鷺と書き夜ガラスとも呼んでいる。幼鳥は体色が茶色であつて、白斑があるので星五位とも呼んでいる。

シラサギ類とゴイサギは春、夏、山林に群集して、果づくりをし、集団繁殖をする。これをサギヤマと呼んでいる。県内野鳥の記録によれば基山、九千部山の谷でも度々営巣したらしい。昭和16年頃国鉄長崎線中原と三田川間の松林や、昭和28年佐賀郡嘉瀬川堤防でもサギヤマがつくられたとのことである。しかしその後、全国的に高度成長の波にのって、土地開発が進み、県内ではサギヤマの例は知られていないかったが、この近年、北芦安町の山林で中規模のサギヤマがつくられている。

ヨシゴイはヨシ原にくる小型のサギで、うなる（鳴る）

ようやく鳴く。縦縞の模様の体色で、首を伸していると周囲の色にまぎれ、わかりにくいサギである。サンカノゴイもヨシゴイに似ているが、大型でその数は極めて少ない。

ササゴイはゴイサギに似ているが昼間もよく活動する。小魚、カエル、ザリガニを捕食する。

ミゾゴイはうす暗い山林に住み、サワガニ、ミミズを捕食する夏鳥で繁殖もしているが、一部越冬するものもある。早朝、夕方に怪音で一定時間鳴きつづける。体色はヨシゴイより強い茶褐色で、群棲せず単独生活をしている。県内では山の深い脊振山や、鹿島市の祐徳院の近くで観察された例がある。

アオサギはサギ類中最大のもので、遠くにいる時はツル類とよく混同されることがある。本県では有明海岸で一年中みることが出来、一定の間隔をとて数羽から數十羽が静止したように見える。有明海の干がたで採餌、休息しているアオサギは、満潮になると棒杭の上へ、または陸地へと移行する。海岸近くの林に移行したものはチュウサギ、コサギなどと樹上に混棲していることもある。

クロサギは岩場の多い海岸に単独または雌雄で住んでいるコサギ位の大きさである。本県では玄海沿岸に少数が生息している。

ムラサキサギはアオサギ位の大きさで県内では極めて珍らしいサギである。昭和42年5月22日、馬渡島で当時馬渡島中学校の福田司教諭が写真撮影に成功した。これが県下の初認記録である。（芸芸課長 手塚静雄）



アオサギ



クロサギ

県内博物館案内（その13）

多久市郷土資料館

- 所在地 多久市多久町1975番地(TEL 09527-5-3002)
- 交通の便 国鉄多久駅からバスで約10分
(市立病院前下車)
- 開館時間 午前9時から午後4時まで
- 休館日 火曜日、国民の祝日、年末年始(12月29日～1月3日)
- 入館料 無 料
設立の経過と特色

多久市は文化財、史跡など歴史資料が豊富である。これらの資料はこの地方の歴史や文化を正しく理解する上に必要なものであり、更に将来にわたる文化発展の基礎をなす重要な財産でもある。そのため多久市では教育・産業・民俗に関する資料の収集をはやくから行い、その活用によって、郷土に対する理解と認識を深め、市民文化の向上に資するという目的で多久町西溪公園の中に郷土資料館が建てられた。建設費は国庫補助金、市費、郵政省簡易保険積立金の融資を得、総額47,948,000円で昭和54年8月5日建設着工、昭和55年3月31日竣工した。構造・規模は次の通りである。

- 構 造 鉄筋コンクリート造り平家建
- 延面積 340m²
- 展示の概要
- (第1展示室)
 - 旧石器時代の茶園原遺跡から出土した尖頭器、石核、剥片等。
 - 縄文時代の前期、中期、晚期の土器片、石器、石斧等。
 - 弥生時代の牟田辻遺跡から出土したカメ棺、つぼ形土器、石斧、裝身具、器台、高杯、石包丁等。
 - 古墳時代の須恵器、土師器、直刀、管玉等。
 - 茶園原遺跡の青磁、天山遺跡の経筒(陶製)等。
- (第2展示室)
 - 東原摩舎関係資料

東原摩舎は多久町東の原、椎原山の西麓に元禄12年

(1699)邑主茂文が建てた学校で儒者河浪自安を初代教授とした。

当時の学問は、中国の孔子の教えである儒学が主で、一方、武道があり、文武両道を修めることであった。『東原摩舎学制』によると、ここでは藩士の教育だけでなく、百姓、町人にも門戸を開いている点当時の公立学校としては注目すべきものであった。第2展示室は、この東原摩舎が生んだ先覚者の資料や教科書などを紹介している。また当時の教具の一つだった「天球儀(てんきゅうぎ)」は占星術に用いられ、広く天体観測にも利用されていたという。注目される資料の一つに初代教授河浪自安の「先家君自安先生墓誌」がある。これは昭和52年発掘された完形品で自安の略歴が、石に彫り込まれている近世の墓誌の一例として極めて貴重なものである。

第3展示室

○聖廟関係資料

多久聖廟は宝永5年(1708年)に邑主茂文が建てたもので、学問の神とされた中国の孔子と四人の高弟を祭った廟である。多久茂文は東原摩舎に独立してこの聖廟を建て、多久邑を文教の地とした東原摩舎の教授深江順房はその著「丹邱邑誌」に「本朝聖殿学校の中興」は茂文であると記している。この展示場には茂文の肖像を中心聖廟建設に関する諸資料、祭儀に関する資料、积菜に使われる服や楽器、龍笛、鐘鼓、鶴鼓など、また积菜用の器、水注、龍杓、爵などが展示されている。

屋外展示場

資料館の前面には圓場整備などで発掘された五輪塔や中央さん(地神)など、肥前の石工の石造物群が四十数点ある。なお郷土資料館横の赤煉瓦の書倉庫は炭鉱主高取伊好が大正9年、西溪公園とともに多久町に寄贈したもので、佐賀県重要文化財の後藤家文書並びに多久家資料及び多久邑全地域にわたる古地図、絵図類等が保存されている。資料の豊富な多久市郷土資料館は、郷土の特色を生かした内容の展示に努めており、これから活動が期待される。

(主事 森永 茂)



▲展示風景

◀資料館全景

昭和57年度行事のお知らせ

常 設 展 (原則として月曜及び祝日の翌日休館)			
展覧会名	会期	観覧料 (内は团体料金)	内 容
佐賀県の歴史と文化展	6月3日(木)～9月26日(日) 2月23日(木)～3月31日(木)	大人 100(60) 大・高生 60(40) 中・小生 40(20)	佐賀県の自然史、考古、歴史、美術、工芸、民俗の各部門の資料を展示し、佐賀県の歴史と文化を紹介

企 画 展 (原則として月曜休館)			
展覧会名	会期	観覧料 (内は团体料金)	内 容
佐賀市理科作品展 佐賀県	9月12日(日)～9月16日(木) 9月18日(土)～9月24日(金)	無 料	小・中・高校生の理科作品展
高木背水展	10月7日(木)～11月3日(木)	大人 500(400) 大・高生 250(150) 中・小生 150(100)	本県出身の洋画家高木背水の生涯にわたる作品を掘り起こし、広く県民に紹介するとともに、明治、大正、昭和にいたる近代日本洋画史的一面をさぐる。作品数約140点
九州グラフィックデザイン展	10月7日(木)～10月11日(月)	無 料	九州及び沖縄のグラフィックデザイン作家と一般公募による作品約150点
佐賀県美術展	11月13日(火)～11月21日(日)	大人 200(150) 大・高生 100(70) 中・小生 50(30)	県内公募の日本画、洋画、書道、写真、工芸、彫塑、デザインの7部門、400点
佐賀県高等学校芸術祭 美術・書道部門展	11月27日(火)～12月3日(金)	無 料	高校芸術祭の一環として、高校生の美術、書道部門の作品展
佐賀大学教育学部 美術工芸科卒業制作展	2月23日(木)～2月27日(木)	無 料	佐賀大学の卒業制作品、絵画、彫塑、工芸の各部門を展示
亮茶翁展	3月1日(火)～3月27日(木)	大人 500(400) 大・高生 250(150) 中・小生 150(100)	煎茶道の祖亮茶翁(佐賀出身)の生涯を遺品、墨跡を中心に展覧し、日本文化史に果たした足跡を追求する。

(各展示会は都合により変更されることがあります。)



博物館報	第 57 号
発行年月日	昭和 57 年 7 月 1 日
編集発行	野 村 綱 明 佐賀市城内 1 丁目 15-23 佐賀県立博物館
印 刷	佐 賀 印 刷 社